東日本から 15 年 現場で活きる「判断力」を
～ あの日の教訓を「現場で動ける知恵」に変える ～

東日本大震災から 15 年。私たちが得た教訓は「災害はマニュアル通りにはいかない」ということでした。混乱する現場で「次に何をすべきか」を判断し、実行するための具体的な知恵を整理します。

1. 住民の安心と協力を引き出す「3つの対応術」

自治会役員の皆さんが、混乱した現場を落ち着かせ、住民の安心を守るためのポイントです。

① 情報の発信拠点（自治会館、日常的に使っている掲示板など）を固定し、不安を解消する

「ここに行けば確かな情報がわかる」場所を平時から決め、不安を解消しましょう。

自治会館がある場合は、専用のホワイトボード（混乱を防ぐ「情報のよりどころ」）と筆記具をセットで備蓄するのがベストです。

② 「今の限界」をハッキリ示し、不要なトラブルを防ぐ

「数に限りがあるため、体調不良者を優先します」など、判断の理由を明確に掲示しましょう。理由がわかれば、周囲の納得感が高まります。

③ 「見通し（次のアクション）」を予告し、情報の空白を埋める

「15 時にまた掲示します」と時間を約束することで、待ち時間の不安や苛立ちを防ぐことが

2. チームの力を絶やさないための「役員の余力」という備え

～無理なく活動を続け、お互いを守り合うための知恵～

●「交代制」をルールにする

疲れは判断を鈍らせますので、数時間単位の交代制を組み、「休むのも重要な仕事」として徹底しましょう。

●「満点」より「継続」：100 点を目指さない勇気をもつ

災害時にマニュアル通りの 100 点満点は不可能です。「今はこれで精一杯（60 点）」と割り切り、まずは動くこと、伝えることを優先しましょう。役員同士で「よくやっている」と声を掛け合うことが、活動継続の支えになります。

●「役割」を分担し、“お客様”をつくらない

受付、掃除、列の整理など、動ける住民には具体的に協力を仰ぎましょう。住民に役割を持ってもらうことで、役員は本来の役割である「全体把握」や「決定」に集中できます。

「地域の『安心』を、カタチにしてみませんか？」

いざという時の地域の「底力」は、具体的な準備から生まれます。

□ 実務面： 悪天候でも使える「掲示セット」は揃っていますか？

・ホワイトボードや、壁に貼るためのテープなどの道具。

・雨でも書けるペン（加圧式ボールペンや耐水マーカー）掲示物を守る透明な袋。

□ 運用面： 誰もが立ち寄れる「情報の場所」は決まっていますか？

（自治会館、地域の掲示板など）

未整備の場合は、この節目に導入や点検をぜひ検討してみてください。

【問合せ】 我孫子市社会福祉協議会 担当：山﨑 04-7184-1539